

目黒稲門会会報



(題字：眞仁田 勉 初代会長)

第42号 2009年3月

発行人：八幡和三郎 編集長：服部 尚彦 事務局長：吉田 博行
事務局：〒153-0053 目黒区五本木2-47-5 Tel 03-3713-2096

『2009年新年会盛大に開催』

2009年1月17日、こまばエミナースにおいて76名が出席、目黒稲門会新年会が盛大に開催された。

石川智子幹事司会のもと、先ず八幡和三郎会長の新年の挨拶があった。八幡会長が昨年会長就任の後に母校の商議委員会で披露された母校が推進する「WASEDA NEXT 125」事業計画の概要を次の通り紹介された。

- (1) 海外からの留学生8千人の受け入れ
- (2) 留学生5千人を収容する寮の建設
- (3) 系列校の充実
- (4) 小、中、高、一貫教育の整備強化
- (5) 東京女子医科大と提携し、早稲田・理工学部の技術力を利用した医学分野の開発を推進する

我々の在学当時とは隔世の感があるが、これらを是非推進し、100年後、200年後には世界に存在感のある早稲田大学を実現して頂きたい。我々としてもその動向を見極めながらバック・アップして行きたい。



目黒稲門会には活発に活動する多くの部会があり、当会を支えるエンジン役を果たしており、各部会長の努力に感謝申し上げます。昨年は俳句の会が出来たが、更にこう言ったものを遣ってみたいと言う分野があれば企画して、部会を作って頂きたい。

若い人達を含めて是非部会に加わり、活躍されることを期待している。

次いで第一部の講演会に入り、司会より本日の講師・阿部喜久雄当会相談役の経歴が紹介された。

- 大正11年12月30日生まれ
- 岩手県旧制中学卒
- 昭和18年12月早稲田大学専門部在学中に学徒出陣
- 昭和19年9月軍隊在隊中に政令により専門部法律科卒業
- 復員後(株)歌舞伎座に事務職として勤務
- その後貿易商社に転じ現在に至る

阿部相談役は、本日の演題名を「吾、基より生還を期せず 学徒出陣」とインパクトの強いものにしたのは、当時の気持ちが全員100%死ぬだろうと思っていたことを表し、この演壇でその時代をご紹介したいと説明された。

(1) 早大入学前後 昭和6年満州事変が起こり、これが後の太平洋戦争へと繋がる所謂15年戦争の前触れとなった。満州では各地で勝ち戦が報道され、一部マスコミはこれに迎合して国民を戦争へと導く役割を果たした。憲兵が威張り出し、特別高等警察が出来て思想犯を取締まった。ほかに治安維持法、国家総動員法、軍機保護法、国防保安法が作られ国民を締め付けた。昭和14年になると物価統制令、映画法がつくられ、軍検閲の映画を見せられた。偶々親戚に早稲田の学生がいたので私も行くことにし、専門部法律科に入った。その少し前の昭和15年9月ドイツの機甲師団がポーランドに侵攻し、第二次世界大戦が勃発。内外共に緊張と不安が交錯し騒然とした世相となって行った。



(2) 学徒出陣 昭和16年12月8日、日本軍真珠湾攻撃に始まる太平洋戦争は、緒戦の勝利に国民は酔いしれていたが、米軍の反攻で次第に不利になり、昭和18年9月文科系学生の徴兵猶予停止が発表され、愈々学徒出陣の時が来た。昭和18年10月神宮球場で数万人の見送りのもと、出陣学徒壮行会が行われた。最早生きて帰れぬと覚悟しつつも、皆忿懣やるかたない状態であった。陸軍は12月1日(海軍は12月10日)と入隊日が指定され、私は本籍地の関係で第八師団(司令部弘前)管区北部45部隊(盛岡)の戦車部

隊に入れられた。そこでの軍隊生活は苛烈を極めた。

(3) 甲種幹部候補生教育 兵隊としての基礎訓練が終わった頃の昭和19年2月中旬簡単な試験があり、3月1日付で幹部候補生、10日付で甲種幹部候補生に採用され、上等兵となって予備士官学校への入校準備に入ったが突然入校先を満州の奉天(現瀋陽)と聞かされてびっくりした。日本各地の同期生320名が集められ、昭和19年4月5日奉天陸軍予備士官学校四平分校に入校した。階級は4月1日付で伍長、6月1日付で軍曹へと進んだ。満州での教育は4ヶ月で切り上げられ、各地に配属されたが私は千島(ウルップ島)に流された。シャケやカニが捕れ、食料には不自由しなかった。その後、戦局が急迫する中で愈々本土決戦が叫ばれる様になり、米軍が上陸するとすれば鹿児島県志布志、関西方面、湘南海岸平塚付近、九十九里浜が予想された。幸運にも私は命ぜられて帯広に帰ったが、一緒にいた同期の人達は樺太やシベリヤに行き帰らぬ人となった。

それ故、我々は尊い命の代償として勝ち取られた平和の有難さを感じ、先達への尊敬と敬意の念を持って生きてゆかなければならないと思う。

次に懇親会に移り、始めに青木英二目黒区長から今年が丑年、一步一步しっかりと、住み良い街目黒を作って行きたいとの趣旨の挨拶を頂いた。

加藤前会長の発声による乾杯、次いで土川副幹事長より当新年会に初参加の12名の方々(本会報8ページ写真参照)の紹介があり、各氏より一言挨拶を頂いた。

談笑が盛り上がるうち中締め時間が迫り、土川副幹事長のリードで肩を組み、大きな輪になって「都の西北」を高唱。荒瀬相談役の挨拶をもって新年会の幕を閉じた。

(島田 記)

新年会出席者 (五十音順)

(来賓) 青木英二目黒区長

(出席者) 浅海敏之、阿部喜久雄、荒瀬修一郎、有山勇次郎、石川智子、石川純子、市瀬達夫、伊藤 悠、稲垣博信、井村正陽、岩佐幸子、岩佐好恭、岩崎春雄、岩崎正夫、岩瀬 暁、大久保建治、大杉邦雄、大竹一子、大野利幸、大山高明、小野 満夫妻、海沼美智子、笠谷興一朗、柏木 博、加藤栄護、川井信義、川崎真樹子、木村昭一、桑野祐光、小池早苗、郡山弘文、小杉 哲、後藤克彦、桜井輝隆、佐藤喜孝、島田久家、嶋田勝彦、庄野 耕、鈴木尚子、鈴木政雄、関 和平、外岡 明、田畑 繁、千野逸平、土川俊雄、手塚仁雄、中上美代子、永田耕治、服部尚彦、林田雅敏夫妻、樋口定廣、樋口俊彦、平田喜章、堀井良造、牧野武夫、松尾洋一、松田哲也、松戸 猛、水野弘文、村上 柁、村上 満、森家一三、保井 正、八幡和二郎夫妻、山本堅太郎、横山 大、吉田成孝、吉田博行、米田文彦、渡邊三郎、大橋ヒデ子(会員友人)

各部会からの案内・報告

囲碁部会

(1) オール早慶囲碁フェスタ2008

慶応義塾大学創立150年を記念して平成20年12月6日(土)日本棋院市ヶ谷本院の2階、3階を借り切って開催された。参加者は慶応OB155名、現役31名の186名、早稲田OB132名、現役19名の151名、計337名でした。第1回戦は早稲田66勝、慶応86勝、第2回戦は早稲田66勝、慶応88勝、計早稲田132勝、慶応174勝で慶応に軍配が挙った。目黒からは八幡和二郎氏(S33年 商)、桑野祐光氏(S33 商研)、郡山弘文氏(S27年 商)、保井 正(S34 政経)が参加した。

(2) 忘年囲碁大会

12月17日(水)恒例の会が下目黒住区センターで開催された。4クラス、ハンディ戦の熱戦の結果は以下の通り。各クラスの優勝者は

- | |
|----------------------|
| A 荒瀬修一郎氏 (S28 法) |
| B 杉山泰大氏 (S28 商) |
| C 永田耕治氏 (S36 商) |
| D 樋口定廣氏 (S17 専法) |
| 年間最多試合 郡山弘文氏 (S27 商) |
| 年間最多勝率 杉山泰大氏 (S28 商) |

が選ばれた。

忘年会は「日本料理 松喜」で有山勇次郎氏(S26理工)、高橋栄一氏(S54 理工)も加わり、09年はオール早稲田囲碁祭に優勝して神楽坂で祝杯をと意気盛んな一日でした。

囲碁部会長 保井 正

カラオケ部会

昔懐かしい歌から最新の歌まで、世代を越えて幅広く、童謡・歌謡演歌・軍国歌謡曲・クラシック等々、お酒を酌み交わしながら、持ち歌を、各自特徴のある節回しで歌い、カラオケを満喫して賑わいを見せております。

先輩・後輩の別なく、時間の合間をみて、楽しみましょう。声を出して歌えることは健康のバロメーターです。
カラオケ部会長 海口昭治

旅行部会

旅行部会は5月頃と11月頃の年2回の旅行を毎年実施しております。基本は専用バスでの一泊二日4食飲み物付きで、おもしろ可笑しくたまには勉強にもなる旅を心がけております。前回は昨年11月に「飛騨高山」と「世界遺産・白川郷」の旅を28名参加で楽しみました。詳細については、本会報の中島侑三先輩の初参加感想記をご覧ください。

今年も5月中旬と11月の2回を予定したいと思いますが、ご希望があれば是非お聞かせ下さい。過去5年



間の実施状況は以下の通りであります。

- *平成20年11月「飛騨高山」と「世界遺産・白川郷」高山市内泊
- *平成20年06月「栃木市と日光を訪ねる旅」鬼怒川温泉泊
- *平成19年11月「義理と人情の三州吉良と館山寺」館山寺温泉泊
- *平成19年06月「新緑の北長野 小布施と善光寺」渋温泉泊
- *平成18年11月「茨城水戸、大洗、袋田の滝」大洗温泉泊
- *平成18年05月「水沢と平泉を訪ねる旅」巖美溪温泉泊
- *平成17年06月「愛知万博見学と伊勢神宮」名古屋市内泊
- *平成16年12月「熱海 MOA 美術館と伊東温泉」伊東温泉泊
- *平成16年04月「春の箱根路を訪ねる旅」箱根保養所泊

今年、日黒稲門会創立10周年の節目の年であり、私が担当して10回目の旅行となります。遠めの旅、近間の旅、料金の問題等色々皆様のご意見が頂けるかと期待を致します。

メールアドレス m_imuracda@ybb.ne.jp まで
 どしどしお願いします

旅行部会長 井村正陽

ゴルフ部会

春爛漫良い季節、第24回ゴルフ会を計画しました。

- 月日：2009年4月24日（金）
- 場所：栃木ヶ丘ゴルフ倶楽部
- 費用：総額23,000円程度（パーティ代等を含む）
 いつもの様にバスで往復します。初参加者の方など
 歓迎致します。ご連絡下さい。

ゴルフ部会長 大野利幸

美術・歴史鑑賞部会

昨年11月29日に「ピカソ展」参加者（13名）のご協力、無事に私にとつての第1回目「美術・歴史鑑賞部会」が終了。出口に先輩の皆様全員姿が見えた時の安堵感は初心者ならではの。昼は六本木のミッドタウン横にある韓国料理「真露ガーデン」で食しました。

今回は、「春は美術館観賞のため、健康のため、外に出てみませんか！」をテーマに企画を立てました。

★第22回美・歴史鑑賞会：国立西洋美術館—17世紀ヨーロッパ絵画

日時：3月3日（火）10：30国立西洋美術館「ルーヴル美術館展券売機前集合、観賞後は懇談会を予定、フェルメールの「レースを編む女」を初めて出品される71点のうち、60点が日

本初公開。さらに30点あまりは初めてルーヴル美術館を出る名品です。

締切り：2月27日（金）名簿による部会長宛
 ★第23回美・歴史鑑賞会：バスで真鶴にある抜群の環境に恵まれた「中川一政美術館」観賞、昼は真鶴港近くで磯料理。

日時：3月26日（木）8：30日黒駅出発、洋画の巨匠の力強い絵画を鑑賞する。

締切り：3月16日（火）名簿による部会長宛
 多数のご参加をお待ちしています。

美術・歴史鑑賞部会長 後藤克彦

ウォーキング部会

11月の日向薬師から大山寺への紅葉狩りは、前日から日本列島を襲った豪雨のため午後出発し、日向薬師側日陰道だけに終わりました。

今回は初めての試みで現地相模原校友会会員7名の特別参加があり、新たな交流が始まりました。またバス停などに幾つもの「熊出没」のポスターが見られ、鈴をつけての緊張したウォーキングを初体験しました。

12月の金沢文庫から金沢八景へのウォーキングでは、文庫は生憎休館でしたが、瀬戸神社を経て野島山展望台では富士山の遠景など360度にわたり、ゆっくりと「夕照」の景観にひたりました。

<今後の活動予定>

第27回 2月28日（土）

—早春の古都に梅の香を求めて—

北鎌倉駅（午後1時集合）—東慶寺—浄智寺—宝戒寺—瑞泉寺—覚園寺—荏柄天神社—報国寺（時間により）—鎌倉駅（希望者は小町通りでの梅の宴へ）
 第28回 3月28日（土）

—日本初洋式の観音崎灯台と海風に舞い散る桜吹雪に誘われて—

京浜急行馬堀（まほり）海岸駅（午後1時集合）—バス停京急ホテル・横須賀美術館前—走水園地—三軒家園地（砲台跡）—観音崎灯台—戦没船員の碑—噴水広場—観音崎自然博物館—たたら浜園地—バス停腰越—浦賀駅（時間により）—観音崎大橋径由—観音寺—八幡神社—バス停鴨居—浦賀駅
 ☆ 開花情報により2、3月に日程を繰り上げました。

ウォーキング部会長 桑野祐光



麻雀部会

(1) 三区連合親善麻雀大会

11月8日(土)、渋谷の麻雀クラブ「スリーハンドレッド」に於いて、第22回三区(目黒・渋谷・世田谷)連合親善麻雀大会が目黒稲門会主催により開催されました。28名参加による親睦を深めた競技の結果、目黒は優勝・鈴木氏、準優勝・上村氏、三位・樋口氏と上位三賞を独占しました。特に樋口相談役は役満賞(大三元)もあわせて獲得しました。

(2) 定例麻雀大会

12月14日(日)、武蔵小山の麻雀クラブ「サン」に於いて本年最後の第36回定例麻雀大会が16名の参加により開催されました。和気藹々の半チャン4ゲームの結果、圧倒的なスコアで優勝は鶴野氏、また準優勝は中村氏、三位は副会長の横山氏でした。競技終了後には雀荘近くの中華料理店「井門」に於いて忘年会を実施し部会員相互の親睦を一層深めました。

(3) 今後の大会予定

4月11日(土) 第23回三区連合親善麻雀大会

6月28日(日) 第38回定例麻雀大会

8月22日(土) 第24回三区連合親善麻雀大会

10月24日(土) 第25回三区連合親善麻雀大会

12月13日(日) 第39回定例麻雀大会(忘年会)

を開催予定しております。皆様奮ってご参加ください。

麻雀部会長 松尾洋一



目黒稲門若手会

若手だけで集まる場も大切にしつつ、さらに世代を超えて稲門同窓として、広く「人生大学校」ともいべき目黒稲門会の輪に親しんでみませんか?

—今後の予定—

◆【若手食事会】

3月28日(土)夜を予定、詳細は別途HP等でご連絡します。

—最近の活動—

◆12月クリスマス会

中西さん宅で手作りホームパーティを開催し、仲良くクリスマスを祝いました。

◆1月の新年会

会場に『若手テーブル』を頂き、更に終了後の若

手二次会で、初対面の方も打ち解けました。

◆先輩に戦争体験を伺う会

阿部相談役に新年会で講演頂けるという貴重な機会に恵まれたため、新年会で広く参加を呼び掛けました。

◆『月島もんじゃ会』

2月21日(土)開催。広く「心は青年」の方々が集合。お陰様で大好評の楽しい会…になっているはずです。

目黒稲門若手会幹事 石川智子



俳句部会

1月16日(金)に第1回「俳句入門教室」並びに「萩句会」を下目黒住区センターにて開催。教室には14名の参加を得、「俳句とは」「俳句の歴史」等基本を学習。引き続き欠席投句を入れて7名で「萩句会」を開催。選句の後活発な合評が行われた。

各自投句3句中2句を下記に掲載。(順不同)

安藤虎雄 まださゆる名のみばかりの春立ちぬ
住み古りて会ふ人毎の御慶かな

梶 恵作 霧晴れて雪戸の村を指さしぬ
朝市の言葉訛りや冬の旅

川井信義 寒月やものうりの声に筆とめて
妻逝きてかざり雛を出しそびれ

桑野祐峰 古い知らずやる気ふくらむ初句会
いつとやに移り香にはほふ花衣

紀本直幸 鴨の南天を食む声の鋭き
状を書く机明るし日脚伸ぶ

保井 正 寒風や友一人逝き二人逝き
雪晴や合掌の里柿かづら

佐藤喜仙 まへうしろ水棹たくみに炬燵舟
濤の音聞ゆる村の寒暮かな

俳句部会長 佐藤喜孝



会員の広場

『俳号はつけるべきか』

佐藤喜仙（昭和40年 政経）

浅学にして、いつの時代から俳号というものが用いられるようになったのか、確かとは把握していないが、少なくとも芭蕉の時代（1644～1694）には俳諧をする人々は俳号を持つのがしきたりのようであった。

現に芭蕉自身伊賀の国で主人藤堂新七郎の嫡子主計良忠宗正（俳号蟬吟）に仕えたころは、「宗房」という俳号を使っていた。三十二歳からは「桃青」と号を変え、江戸で談林派の宗匠を目指し、三十四歳で宗匠として独立したとされている。ところが三十七歳の冬に突然門人で幕府出入りの魚商を営む杉風から生簀の番小屋を提供され、深川に隠棲した。その庭に「李下」という門人が風情にと贈った植物の芭蕉が良く根つき繁茂したので、門人たちは草庵を芭蕉庵と呼ぶようになり、やがて「芭蕉」が桃青に代わって号となったそうである。

現在でも俳句の世界は基本的に号（または名前）で呼び合う世界である。披講時の名乗りも原則苗字は名乗らない。号、あるいは名前を名乗るのである。筆者の憶測に過ぎないが、町人が俳諧と言う遊びに参加するようになり、自分の作品に名前が必要になったとき「清兵衛」とか「権八」ではやはり格調が得られない。そこで「其角」とか「去来」とか格調ある俳号を必要としたのではなかろうか。

発句が俳句になっても其の流れで明治、大正、昭和の十年位までは大方の俳人は俳号を持ったのであろう。当時の俳号の特色は男性は「子」の字を使い、女性は「女」の字を使うケースが多かった点である。具体的に言うと、男性では「虚子」「秋桜子」「誓子」女性では「久女」「鷹女」「しづの女」等がそれである。但し、戦後は本名をもって号とする俳人が増えているのはまぎれもない事実である。特に女性の場合はこの傾向が顕著である。

だが、筆者は定年俳人（必ずしも企業などを定年退職した人を意味するのではなく、人生の三十年から四十年をある職業「主婦業も含む」に携わり、その後俳句を始めた人を意味する）、要するに純然たる趣味として俳句を始める人は俳号を持ったほうが良いという意見の持ち主である。何故ならば、「俳句は世界最短の詩である」と言われているように俳句を作るということは詩人の発想が必要であるが、定年俳人の人格形成のベースは一口で言えば「経済人間」ではなかろうか。いわゆる詩魂とは相接しない人生を歩んで来た人々である。そういう方々が趣味として俳句を選び定年俳人となった場合、筆者は俳号を使うことにより、スイッチを切り替えられると考えている。

私事で恐縮ですが、五年前に俳句を始めた当初は本名「喜孝」を号としても使っていたが、三月ほど経て

どうも本来の自分と、俳句を始めた自分の境界線がいまいで気持ちがすっきりしないのである。そんな折たまたま「羽化登仙」と言う言葉にであい、なるほど人間の究極の願いは不老長寿の仙人になることであると気づいたが、現実にはそのような事はないことは十分承知であるが、少なくとも心意気だけはそう持たたいと考え俳号を「喜仙」としたのである。今では参加している三箇所ほどの句会では私の名は喜仙で通っている。「喜仙さん」と呼びかけられると俳人としての私のことだと嬉しくなる。また、郵便なども俳句関係は喜仙で通しているの、喜仙宛の郵便物は、俳句関係であるとわかるのですぐ開封するが、本名宛の郵便物は、税金や国民健康保険の納付書等がほとんどで、開封する意欲が大いにそがれる。もちろん結局は開封せざるを得ないのであるが。

では、俳号は実際どうやって付けたのであろうか。正岡子規は瀬祭書店主人、竹の里人等名乗っていたが咯血したことから「鳴いて血を吐くホトトギス」の意で子規（ホトトギス）と命名。高浜虚子、河東碧梧桐は各々実名の清、秉五郎の音をとってつけている。山口誓子も本名の新比古の音から。変わったところでは師にあたる誓子に俳号の命名を依頼した鷹羽狩行の由来。誓子は狩行の本名「高橋行雄」の音から命名したとのこと。伝説によれば高野素十は東大の医局時代花札遊びに熱中しており、素十六という役を作るのが得意だったので仲間が命名したとか。こうやって有名俳人の号命名の由来を調べてみると意外に単純な動機で号を付けていることがわかる。

どうですか。俳句を詠む人は無論のこと、俳句に関係ない方でも号の一つ位お持ちになりませんか。

『飛騨高山と「世界遺産・白川郷」を訪ねる旅に参加して』

中島脩三（昭和31年 政経）

旅行部会長井村さんから旅行案内を戴き、早速初参加の申し込みを致しました。

富山県生まれの私にとりましてはもう一度行って見たい隣の岐阜県。それは富山での思い出深い二大河川神通川と庄川の源流です。

飛騨高山市は日本の小京都と呼ばれ、又十年前に訪れた中国雲南省、麗江市「世界遺産」とは姉妹都市を結び、古い街並み、二階建の家屋が隙間なく軒を連ねて江戸時代の日本の集落かと錯覚させられた記憶がよみがえって来ました。

一方、世界遺産・白川郷は1995年ユネスコから世界遺産に指定されました。厳しい自然条件が生み出した山里の文化を築いてきた、その象徴が茅葺の合掌造りの家屋です。現在白川郷には築100年から200年の合造りの家屋が113棟残っており、30年から50年に一度行われる屋根の葺き替えは現在も伝統的に互助作業で行われています。

11月24日天気予報は曇り時々雨模様と伝えていました。午前7時目黒駅を出発、中央道→長野自動車道→安房トンネルと進むに従って祈る思いが通じたか晴れ模様が続きました。

途中冠雪の南アルプス連山、甲斐駒、八ヶ岳連峰を目前にしながらか多くのトンネルを経て安房峠、平湯経由で高山市内に入った。市内は紅葉の季節を迎え、鮮やかな色を競ってコガネ色のモミジ、針葉樹が最後の輝きを誇っていた。漆黒の町並みに良く似合う高山市だ。市内見学のハイライトは国史跡三千坪を越える高山陣屋です。全国に唯一現存する郡代・代官所、徳川幕府は飛騨を幕府直轄として以来明治維新に至るまで177年間代官・郡代が江戸から派遣された。全てが時代劇を見る思いだ。

初日の宿泊地、本陣平野屋別館では市内一望の温泉で湯浴み。夕食は地元名産の飛騨牛を堪能、夜はカラオケで「奥飛騨慕情」も飛び出した。

11月25日今年7月に新開通した東海北陸自動車道で一路世界遺産の村落白川郷に向った。訪問先は重要文化財「和田家」合掌造り、県指定文化財「民家園」、「萩町城址」公園展望台です。

多数のトンネルを潜り最後に日本一、二の長さを誇る12キロのトンネルと眼前に快晴の白川郷・合掌家屋が現れ、前日降った新雪に映える紅葉と山裾を流れる霧が天空に繰り広げる紺碧の空に映えた。

これだけ三拍子条件が揃った景観に接することは予期せぬ事です。

これも皆様の普段の摂生と幹事の努力の賜物と感謝する次第です。

しかしもう直ぐ白一色の厳しい銀世界に切り替わる直前の高原の中に懸命に生きる人々の屈託のない笑顔とおしるこのサービスに接する度に頭の下がる思いがする。暫く振りに都会の雑踏を離れ、山村の自然に接して心の洗われる思いで一杯です。

リレー随筆

『父とワセダと私』

鈴木尚子（平成5年 法）

ワセダの長所の一つとして、個々の学生の個性を認めることにより、その成長の可能性を高める、という点が挙げられると思う。具体的には、学生に対し、特定の思想や考え方を強制しないこと、学生の言動が一般的な社会のルールに則ったものである限り、決して干渉しないこと、等である。

ワセダで学び、ワセダを愛した私の父も、まさにそのようなワセダの理念を実現する人間であった。

父は、読書好きだった。私が物心付いた頃には既

に、家にあった幾つもの本棚は、父が買ってきた本で溢れていた。

そんな父に連れられ、私はよく本屋に行き、本を買ってもらった。私の家族は、子供にお菓子やおもちゃを無制限に買い与えるようなことは決してなかったが、本だけは別で、父はいつも、幼いながらに私が一生懸命に選んだ本を、何も言わずにレジに持って行ってくれた。

私の意思とは無関係に「子供の教育に役立つ」本を与えられることもなければ、私が選んだ本が頭ごなしに否定されることもなかったのである。

そのような父の姿勢は、本だけでなく、本の中身である知識や思想に関しても同じだった。私が本や新聞等から得た知識を基にした自分なりの意見を述べると、父はどんなときでも、未成熟な子供の考えだからといって馬鹿にしたりはせず、きちんと話を聞いた上で、自分なりの意見を返してくれた。まるで、大人に接するように対応してくれたのである。

さらに、私が高校三年生になり、大学受験のための願書提出時期を間近に控えていた頃のことである。

当時は、女性は四年制大学に進学する必要などないという考えが、現在よりは強く残っていたように思う。また、私が通っていた高校は慶応義塾大学への進学者が多く、周囲では、早稲田はちょっと得体の知れない怖いところ、というイメージがあったのも確かである。

しかし、自分の出身校を誇りに思う父の姿を見ていた私は、ごく自然にワセダに行きたいと思うようになっていた。そして、単純に法律というものへの好奇心から、法学部を選んだ。

父は、私が受験する大学・学部を決定するに当たり、「ワセダを受けなさい」とは一言も言わなかった。反対に、女の子なのだから女子大の方がよいとか、文学部の方がよい、などとは全く考えてもいないようだった。ただ、私がワセダに合格した日、父は、本当に、心から嬉しそうな顔をした。

私は、幼い頃に本屋で本を選んだのと同じように、自分の生き方も自分で選択することができた。他人からみれば、もっと素晴らしい選択肢が存在したのかもしれない。しかし、自分で選択できること、それ自体が、私にとっては最大の幸福であったことだけは断言できる。

これまでの私の人生は、自分の子供に特定の思想や考え方を強制せず、過度の干渉をしない、そんな父の理念に支えられてきたものである。

父は四年前にこの世を去ったが、ワセダの理念はいつまでも存在し続け得る。私も、いかなるときでも、偏見を持たず、固定観念に囚われず、ワセダの理念を実現していける人間でありたいと思う。

会員の広場

『雄弁会の語り部』

山本堅太郎（昭和36年 政経）

昨年7月9日だったと思います。目黒雅叙園で開かれた「手塚よしお夜明けの会」受付で6番テーブルを指定され、3分スピーチをするよう事前指名されました。

これが目黒稲門会に入会するキッカケでした。テーブルは12人掛け、服部尚彦氏夫人を除き男性11人全員が早稲田OBではありませんか。しかも、水泳、ボート、蹴球など体育会出身者が多いのに戸惑いました。名前を名乗った途端「卒業年次は」「学部は、クラブ活動はどこ」「高校は」と矢継ぎ早に聞かれます。「36年卒、政経の新聞学科ですが、卒業は雄弁会です」「兵庫県立神戸高校です」。

雄弁会は文科系とはいえ、当時の気風は上下関係に厳しく体育会的雰囲気の中で青春時代を過ごしてきただけに、全員が初対面でしたけれども約2時間、親しみと安心感にひたっていました。

とりわけ左隣の川井信義さんが近所の駒場にお住いで健康診断の医院も同じとわかり、右隣の服部夫妻からも熱心に入会を勧められました。日を置かず吉田博行事務局長から入会申込書一式が届き、遂に“逮捕”されてしまったのです。

入会後は飲み会のよん月会とカラオケ部会に参加させていただいております。

—稲門会は大学の集金マシンか?!—

実は私が目黒区青葉台の住民となったのは'90(平成2)年の秋で早くも19年目。この間、稲門会から誘いがなかったわけではありません。他地区でしばしば見受けられる母校の評議員、商議員選挙に利用されたり、大学当局の集金マシンとなる一面を見聞きするにつけ、敬遠してきたのも事実です。

5~6年前だったでしょうか。友人・知人の教授から政経学部教授会で「卒業生は黙って寄付だけしてくれればいいんだ。大学経営や学部運営に口出しするな」と相次ぐ発言があったと聞き、早新会(新聞学科のOB会)総会の席上、総長就任直後の白井先生と政経学部長(当時)に直接抗議したことがあります。答えは、「そんなこと言っている教授はいないはずですよ」など、むにゃむにゃで終始してしまいました。こんな話を書き並べていると、反早稲田と思われるかも知れませんが、皆様と同様、私もWASEDA大好き人間です。誇りも堅持しています。

—ふたつのクラス会は健在—

新聞学科800人の早新会は最後の卒業生(昭和44年卒)が還暦を過ぎ、総会出席者が50人を切る事態となって昨夏に解散。しかし、同期クラス会は健在。朝日新聞論説委員だった友人の発案で現役時代に発行していた機関誌を今年復刊する予定です。さらに第2語学(独、露)のC組は2ヵ月に1回のペースで賑やかな飲み会を続けています。

こうしたクラス会も大切にしていますが、私の場合、断然多いのは雄弁会のつきあいです。直近4ヶ月の動きを手帖からピックアップしますと...

▽08.09.29. 同期の玉沢徳一郎衆議院議員25年表彰と最後の演説を本会議場で傍聴。学生時代の模擬国会で玉沢が保守党首相、私が労働党委員長を務めた仲だが、永年にわたり彼を応援してきたのは私にとって青春の証だった。従って玉沢に公私とも便宜を頼んだことは一度もない。

▽08.10.08. 恒例の玉沢激励会は引退・感謝の会となり安倍晋三さんのあと、森喜朗さんが到着するまで約20分つなぎのスピーチ。

▽08.11.24. am.9:30 ~ pm.9:40 母校で大隈杯争奪全国学生雄弁大会の審査員、5回目。長時間ゆえ審査は疲れるが、打ち上げ会で各校の学生と話すのは楽しい。

▽08.12.10. ~ 11. 1年後輩で日本航空部長から海部内閣首席秘書官となった金石清禪君の通夜・告別式。金石は私の後の幹事長だった。

▽08.12.15. 大隈会館・楠亭で新聞社志望の学生と懇談。あと高田馬場のちゃんこ鍋店で昭36,37年の親しい仲間と飲む。なぜか、食糧自給率向上で激論に。

▽09.01.17. 正午から銀座で慶応義塾弁論部130年史出版祝賀会に招待された。2002年秋に雄弁会100年史を編集長として手がけた縁だ。3時40分、目黒稲門会新年会に滑り込んだ時はホロ酔い気分。

▽09.01.24. ~ 25. 早慶討論会全勝が自慢のT君が石川県能美市長選に出るから来てくれという。吹雪の中、出陣式で挨拶。地元森喜朗さんは対抗馬支持で悩ましい。

—当会で雄弁会OBは荒瀬、手塚、松田、山本の4名—
目黒稲門会で雄弁会OBといえば8年先輩の荒瀬修一郎さんがいらっしゃいます。失礼ながら荒瀬先輩を詳しく存じ上げなかったのは、昭和20年代後半の雄弁会で反主流派、あるいは学外へ飛び出し政治の現場におられたからだと思います。同期で親友とおっしゃる石川士郎氏(父は石川準一郎教授、フジテレビ編成局長)や小島静馬氏(戦後の雄弁会第7代幹事長、衆・参院議員)ら私も知っている方々との交友を伺って納得しました。

私は第25代で松田哲也区議は82代幹事長、手塚仁雄君はそのとき副幹事長でした。逆じゃないかと思われるかも知れませんが本当です。第11代幹事長・渡部恒三で副幹事長が藤波孝生と海部俊樹という時代もありました。

狭い我が家のマンションの食卓を編集室がわりに雄弁会100年史を3年かけて作ったおかげで明治~平成4代、人物では肅軍演説の斎藤隆夫から最近の女性幹事長まで80年史で欠落していた大学紛争世代も含め私は『雄弁会の語り部』となってしまったのでした。

校友会便り

「東京都23区支部大会」—講演会・懇親会—

- 1) 日時 :平成21年3月8日(日)
午前11時~午後1時40分
- 2) 会場 :リーガ・ロイヤルホテル東京
ロイヤル・ホール(3F)
- 3) 参加費 :8,000円
- 4) 申込先 :目黒稲門会事務局
- 5) 締切日 :3月1日(日) 厳守
- 6) 「講演会」:講師 二宮漁場会長 中川 洋氏
演題 「Capacity to Enjoy」
- 7) 「懇親会」:奥島前総長、福田代表幹事を
囲んで

—アトラクション—早稲田大学ハワイ民族舞研究会

- 8) 講師紹介:中川 洋氏
昭和49年 政経卒、野村総研、
モルガン・スタンレー、メリルリンチ
で25年アナリストをされ、副会長と
なる。目黒碑文谷に二宮漁場の直営店、
和食「母庵」(ママ・アン)を設立。
—目黒稲門会の皆様、多数のご参加を—
23区担当幹事 大竹一子

各部会からの案内・報告

グルメ部会

『食は目黒にあり』を標榜するのがグルメ会です。早大OBの芥川賞作家、辺見氏の「物食う人々」を一読すれば、我々は生きるために食べるのではなく、食べるために生きていることが納得できます。

人生とは食することである、と理解すれば楽しく平和な人生を送ることができます。リーズナブルな値段で美味しいものを召し上がりたい方、ご参加をお待ちいたしております。

グルメ部会長 海沼美智子

よん月会

目黒稲門会員、誰もが参加でき、気軽に飲み語り合う「よん月会」。いわば、同窓で作る都会的地域の会でもあるのです。毎月第四月曜午後6時より8時まで、「あっぱれ」都立大学店にて4,000円で飲み&食い放題。楽しい話題もボンボン飛び出します。

入会を考えている方、入会したけれどお仲間をお探しの方、飛び入り大歓迎!ブラッとご参加ください。初参加される方は、入り口に位置している幹事に一言お声掛け下さい。直ぐ貴方と同窓である全出席者にご紹介します。皆に歓迎され、其の後は、サッと話の輪に入ることが出来、楽しい世界が出来ると思っています。いわば同窓で作る都会的地域の会でもあるのです。

是非、お足を運んで、お試し下さい。

よん月会幹事 土川俊雄

新入会員



柏木 博 氏 (昭和27年 商)
趣味:ゴルフ、小唄、詩吟(原町在住)
同期の島田さんの紹介です。郡山さんとは
北辰商事の同期入社で現在は好々爺です。
昨年5月、北区から娘の近くの目黒に越
して来た独身貴族です。



平田喜章 氏 (平成7年 社会科学)
趣味:自然食研究 (目黒在住)
昨年目黒区に転居しました。今回目黒稲門
会のことを知り、入会をお願い致しました。
宜しくお願い致します。



西銘公一 氏 (平成11年 文)
趣味:料理、旅行 (川崎在住)
自宅は目黒区ではありませんが、会社が
目黒駅の直ぐ傍なので入会させて頂きま
した。昨年9月に仙台から移って来たばかり
で、これから諸先輩方と母校の事や、目
黒の事について話しに花を咲かせていっ
たらと思います。宜しくお願い致します。

新年会初参加者

山本堅太郎、小林 彰、米田文彦、柏木 博、村上 柁、
松戸 猛、平田喜章、佐藤喜孝、笠谷興一郎、
稲垣博信、岩崎春雄、吉田茂孝の各氏(写真左から)



HP便り

目黒稲門会ホームページ(HP)には最近流行のい
わゆるブログもあります。『目黒稲門会』で検索して
トップページに行き、そこからお入り下さい。

Commentsをクリックして是非ご意見・感想等をお
書き下さい。(小杉 記)

編集後記

新年会が終わり、多難な環境の中で新しい年が始
まった。阿部相談役のお話は艱難辛苦を経験し
た世代には、身の回りに居られた年上の親、親族と
のその時代の様々な出来事を想起され、身の引き
締まる心地がした。実際に経験しない限り、真に
理解は出来ない。

我々の世代の責任とは言え、戦争を語り継ぐ難しさ
を改めて噛み締めた。(服部 記)